

13 指導例の実践

児童・生徒がどのような場面で自分の意思を決め、どのようなやりとりのなかで合意形成を図っていくのかを、指導例を使用し小学校、中学校で授業を行いました。

◆7-4 小学校 5年生社会科「自然災害とともに生きるわたしたち」の実践

(1) 学習活動の実際

①「友だちの考えを聞いたうえで、考えをまとめよう」の場面

前時までの授業で児童は、大震災がおこっても「私の家は高い所にあるから津波は来ない」や「いざというときは防災グッズを持って逃げれば大丈夫。」という考えをもっていました。この時間では、児童にとってより切実感をもって考えることができるように、新たに震災直後の火災や津波の資料などを示しました。すると、小グループの話し合いの中で、「家の中に自分一人だったら、どうすればよいだろう」という新たな学習課題が生まれました。

C1：私は一人だったら、ずっとペットという。

C2：ペットは避難所に連れて行けないよ。

C1：どうして？

C2：だって、ペット嫌いな人もいるし、アレルギーの人もいる。

C3：私はペットのことを考えている余裕がないと思うな。

C1：私にとっては家族同然だよ…見捨てられない…



このように、より自分のこととして、具体的な状況を考えることができるようになりました。

②次の授業時間につながる学習課題の設定

小グループで話し合われた内容を取り上げ、次時の学習課題として「ペットは避難所に連れていくことができるのだろうか？」と発展することになりました。次時の学習に向けて、実際に市役所や保健所に電話をしたり、インターネットで調べたりする児童の意欲的に取り組む姿がありました。

(2) 本単元を実施してみてもの課題

- 大きな災害を体験したことがない児童が多く、大災害の映像資料を何のために見せるのかというねらいを明らかにし、児童の実態に合わせて、資料を厳選して提示することが求められます。
- 児童一人ひとりが「主体的に考える」「自分なりの考えをもつ」「他者の考えをとおして自分の考えを再構築する」ことをねらい、授業を構成しました。このようなねらいを単元ごとに、または、1時間ごとに授業者が明確にもちながら日々実践していくことが求められます。

児童の意欲や思考をどこまで伸ばせるか、深められるかが、これからの課題として考えられます。

◆10-2 中学校 2年生社会科[地理的分野] 「鎌倉の防災について考えよう」の実践

(1) 学習活動の実際

①「これからの鎌倉について話し合おう」の場面

鎌倉の防災について個人で調べた内容を、同じ意見同士の小グループになり、他者の意見を参考にしつつ、自分のグループの意見の根拠を明らかにしていきます。その後、小グループで発表して、その意見に対する討論を行いました。

発表：私たちは鎌倉の観光業、第三次産業を守るためには堤防が必要だと思います。

S 1：堤防をつくるお金はどこから出るの？

S 2：私は反対です。調べてみたんだけど、実際に堤防をつくと、私たち市内中学生の教育費の約3倍くらいかかるらしいです。

S 3：堤防をつくることに賛成です。鎌倉市民の税金でやるしかないと思います。

S 4：観光業をまもるためだから、私は企業にお金を出してもらえばいいと思います。



発表した意見に対して、調べてきた資料を基に数値的な根拠から賛成意見や反対意見、その他の考え等が出てきました。

②生徒の感想より

堤防の建設をめぐるっては、いろいろ対立するけど、一番大切なのは一人でも多くの命を守ることだから、それを軸として考えていくことが大切じゃないかと思いました。そのためにも、まずは市民が現実を知って、いろんな立場に立って、真剣に考えていくことが重要だと思います。

メリット、デメリットともにあることが分かりました。自分たちではよいと思っていた考えも、他のグループからはデメリットが多くでることもあり困りました。また、意見が対立することも多くあり、それをふまえて考えていくのが大切だと感じました。

(2) 本単元を実施してみたの課題

- 本単元は地理的分野の学習単元で行いましたが、経済面（特に財政面）について知識がないと、実現できない空想の話し合いになってしまいます。現実的な問題として防災について扱うためには、経済上の課題を解決しないと実現が不可能なので、公民的分野や総合的な学習の時間でも扱うなどして今後の学習にも継続していくことが大切です。
- 学習課題のとらえる内容が大きすぎると、様々な意見も出るため、話し合いで議論が深まらない可能性があります。本授業例でいえば「堤防をつくるべきか」という学習課題に絞れば、意見が様々な内容に拡散できずにできたと感じます。討論の流れの中では、教師が主導で焦点を絞っていくことが必要です。